

主 題：新生した人 3

聖書箇所：コリント人への手紙第二 5章15節

新約聖書Ⅱコリント5章をお開きください。

新しく生まれ変わった人、特にパウロの新しい生き方についての学びを私たちはこのテキストを通して始めました。パウロのこの証は、私たちひとりひとりに自分の信仰を吟味する機会を与えてくれます。本当にこの救いに与っているのかどうか、また同時にあなたの信仰生活は主の前に立った時に後悔のないものなのかどうか。パウロは私たちの歩みをしっかりと吟味する必要を教え迫ってくれます。

パウロはⅡコリント5：9の中で「肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」と語ります。パウロというひとりの信仰者が私たちに語ってくれることは、彼自身は主に喜ばれることをいつも願いながら生きていたということです。神様が喜んでくだされば、もうそれでいい。この地上での生活も、死を迎えた時も、私がただ一つ願っていることは神に喜んでいただくことだけだという思いを持ってパウロは生きていました。ですから彼は主イエスから受けた神の恵みの福音を証する任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しくはないと言っています。たとえこの身が減びようと、たとえ私が死を迎えようと、私は主からいただいたこの福音を伝えるという務めをしっかりと果たし終えることができるのだったらそれでいいと。パウロは長生きしようとか、自分の生活がどうだなどと考えていなかった。彼が考えていたことは、私は主の前に正しく生きて行きたい、主の前に後悔のない、主が喜んでくださる人生をしっかりと歩みたいと願って生きていました。ご存じのようにパウロは非常に熱心に、また忠実に主に従った主の奴隷でした。

私たちの疑問は、このように生きたパウロの信仰の歩みの土台は何だったのか、また原動力は一体何だったのか、彼は何をもってこんな生き方をしたのか、その秘訣は一体何なのかです。なぜなら私たちも同じように歩みたいからです。パウロが歩んだように生きること、それは神があなたや私に望んでおられる生き方でもあります。そのために我々はどのように歩むことが必要なのか、そのことを知る必要があります。そこで私たちはこのパウロの証を見て来たわけです。

A. 「救いの力」

彼がまず私たちに教えてくれたのは、救いというものがどういうものなのかです。人間の間にはいろいろな救いは伝わっています。救いというと、例えば天国に入るための切符をもらうことで、天国が保証されたらもうそれで私はゴールに到達したのだと思っている人たちもたくさんいます。でも聖書を見ると、聖書が教える救い、神の与えてくださる救いというのは違いました。それはその人を全く新しく造りかえる力を持っていると。救いには人を完全に造りかえるだけの力があるということを私たちはみことばを通して教えられて来ました。そのことを通して、ただ自分で救われていると思い込んでいるだけなのか、それとも本当に神様の救いをいただいているのかを吟味する、そんな機会を私たちはいただきました。

B. 「動機」：彼の生活の原動力

そして核心部分です。パウロが主に忠実に、熱心に歩んでいった秘訣は一体何なのか、彼のその生活の原動力は何なのかを私たちはパウロから教えられて来ました。

1. 「神への恐れ」 11節

一つ目は神への恐れがその原動力であるとパウロは言いました。キリストのさばきの座に立つということをもパウロは覚えて、そのために日々備えをなしていたと。なぜならイエス様の前に立った時に、信仰生活のすべての真価が明らかにされるからです。信仰者としてあなたが行なって来たすべてのこと——これはあなたの奉仕だけを指しているのではありません、あなたの家庭や職場、学校などにおける信仰者であるあなたの生活のありとあらゆることが、本当に神の前に喜ばれていたのかどうか、そのことがあなたに明らかにされるのです。神はもうちゃんと知っています。問題なのは私たちがそのことを知らないゆえに、神がそのことを明らかにされると。主がみことばを通して教えてくださったそれぞれの務めを忠実に果たして来たのかどうか、このキリストのさばきの座にあって明らかにされることであると。私たちはいっぱい失敗もあるし、できていないところもたくさんあるけれども、自分の歩みが結構神様に喜ばれているのではないかと思っているかもしれない。でも本当に主が喜んでおられたのかどうか、そのことがこのさばきの座において明らかにされると。

ですからパウロは恐れたのです。恐れるということばは確かに「畏敬の念」や「尊敬」という意味があります。しかし同時に、この時に自分の本当の姿が自分に明らかにされることを考えるだけで、彼は恐れを抱いた。先週、このみことばを学んでこの一週間の歩みを振り返ってみて、私は恐ろしいと思いました。もちろん主にお会いすることは喜びであり、その時に私たちは神様を心から賛美するのです。神が問題ではないのです。問題は自分なのです。神の前に立った時に、本当に私の信仰者としての歩みが神の前にどれだけ価値あるものだったのかが私に明らかにされる。それを考えるだけで与えられているこの日を正しい動機を持って主に従い続けて行かないといけないとの思いを強められました。そんな方もおられるのではないかと思います。そういう思いを持って、主を恐れながら生きている人たちがたくさん集まっているならば、その教会は間違いなく神に喜ばれる教会です。だから神に喜ばれる教会へと私たちの教会が変えられて行くためにも、あなたが神を恐れる者として成長して行くことです。大切なのはあなた自身が変えられて行くことです。それが一つ目のパウロの生活の原動力でした。

2. 「神の愛」 14、15節

二つ目にわたしが学ぶことは14節「**というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。**」と、神の愛が彼の二つ目の原動力であったことを教えます。ここで皆さんが「**キリストの愛**」と聞いてまず頭に描くことは、私たちの「**キリストへの愛**」というふうに思われると思います。確かにパウロはこのように熱心に、忠実に生きました。その背後に間違いなく彼は神を愛していた。そしてその神への愛がこのような歩みをもたらしたのだ、このような忠実な信仰生活へと駆り立てていたと、私たちはみことばを通して確かにそのように教えられてもいます。私たちが神への愛が増し加わることによって、もっと主に喜ばれて生きたいと、そういう正しい思いを日々の歩みにもたらすことも知っています。ですから私たちが「**主に對する愛が増し加わるように**」と祈ります。

しかしその歩みの限界もあなたはきっとご存じだと思います。神様への愛が心に満ちている時は、確かに神のために生きようという強い願いを持っています。しかしその思いが弱くなった時は、そのような生き方への熱意が薄れて行ってしまいます。本当に神を愛している時は喜んで主に従おうとするけれども、その思いが薄れて来た時はそれが私たちの生活にそのまま反映されて行きます。神を愛することが我々信仰者の原動力だとすれば、この生き方の問題点は自分でいつも動機づけをし続けなければならないということです。神をもっと愛するように、もっと愛するようにと自分で努力し続けたいといけません。現実を見るとそのように歩み続けることができないことも皆さんご存じだと思います。そしてこういう歩みをしている人は、自分はだめな信仰者だ、信仰の弱い者だという結論に導かれ、そういうレッテルを自分に貼ってしまったります。またパウロのようなすごい信仰者を見る時に、私は絶対にパウロのようにはなれないのだと初めからあきらめてしまうのです。

実はパウロが私たちに教えてくれるのは、神様への愛だけが彼の忠実な信仰生活の原動力ではなかったということです。確かにパウロは忠実に生きました。でもその力になっていたのは、そのような生き方に駆り立てていたのは神への愛だけではなかった。14節にはキリストへの愛とは書かれていません。パウロはここで「**キリストの愛**」と記しています。ということは、彼のような忠実な熱心な歩みを私たちが実践して行くための鍵は、救われたあなたのうちにある「**キリストの愛**」だと教えているのです。彼が熱心に主に従い続けて行ったのは、彼のうちにある「**キリストの愛**」が鍵なのだとこのみことばは私たちに教えているのです。先ほどから「**キリストの愛**」と繰り返しています。これがキリストへの愛ではないと言えるのは、この「**愛**」ということばにアガペーが使われています。神の愛です。残念ながら私たちはその神の愛でもって神を愛することはできないことはよくわかっています。神がその愛でもって愛してくださった。ですからこの14節は私たちにパウロの歩みの大切な、大切な秘訣、それは神の愛が彼の信仰生活の中で、このような歩みの原動力であるということを教えてくれているのです。

14節には「**取り囲んでいる**」ということばが出ています。「**何々することを強いる**」とか「**追い立てる**」、「**駆り立てる**」という意味を持った動詞です。レオン・モーリス先生はこのことばに関して「**何かの行為をさせるという意味で用いられる、また動機として推し出す力である**」と言っています。だからこの14節が私たちに教えているのは、「**キリストの愛**」が動機として私を推し出して行くのだ、この「**キリストの愛**」が何かの行為をさせようとしているのだということです。パウロはこの箇所、神の愛はその愛をいただいた者、すなわち救われた者のうちにあって行動を生み出すのだということを教えています。それが彼の信仰者としての秘訣であったと教えるわけです。

1) キリストの愛とはどういうものか。

ではこの「**キリストの愛**」について、それがどういうものであったのかをご一緒に見て行きましょう。まずイエス様の愛ということを考えると私たちは二つの特徴を覚えます。

(1) 「**みこころに服従**」：父なる神のみこころに服従[一つ目の特徴]

一つは父なる神のみこころに従順であったということです。みこころに服従されたということです。ちょうどイエス様がヨハネ6：38で「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。」と語っています。主イエス・キリストが天から下って来られたのは、「自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方」、父なる神様の「みこころを行なうため」であると言われて、ヨハネ17：4、イエス様のお祈りのところですが、「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。」と、主イエス・キリストは父なる神に祈っておられる。主イエス・キリストはこの地上におられる時、父なる神様の栄光を100%現わしたのです。私たち人間は何のために生きているのですかと質問すると、皆さんは「神の栄光を現わすためです」と完璧に答えられると思います。イエス様は神の栄光を完璧に現わしたのです。

どのようにして現わしたのか、またどのようにして神の栄光を現わすことができるのか、イエス様は教えてくださっています。それは父なる神のみこころに従うことだけです。だからイエス様はすべての点において父なる神のみこころに従ったわけです。その歩みが父なる神の栄光を現わしたのです。パウロがこのイエス・キリストの歩みについてこんなふうに語っています。ピリピ2：6-8「:6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることのできないとは考えないで、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」、つまり創造主なる神であられる方が人としてこの世に来てくださったという話です。そして「自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」と続きます。日本語の訳で「従う」ということばが繰り返されています。イエス様は父なる神のみこころに従順に従われた。人としてこの世に来ることも、そして十字架に架かって行くこともすべて父なる神のみこころであり、それに完璧に従って行かれた。主イエス・キリストの愛ということを考える時に、イエス様は確かに父なる神のみこころに従われたのです。

(2) 「身代わりの死」：[二つ目の特徴]

もう一つの特徴は身代わりの死です。主イエス・キリストはご自分のことよりもあなたのことを優先してくださった。創造主が、全被造物によって崇められるべき神がご自分のことよりもあなたのことを考え、あなたの必要を優先してくださった。そしてあなたのためにみずから進んでとてつもなく大きな犠牲を払ってくださった。パウロがローマ5：8で「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」とあります。あなたがまだ罪人であった時にキリストがあなたのために死んでくださったことによって、神があなたを愛しているということを明らかにしてくださった。主イエス・キリストはあなたの身代わりとなって十字架で死んでくださった。

ヨハネはIヨハネ3：16で「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。」と語っています。人間が彼からいのちを奪ったのではない。イエス・キリストはみずから進んでそのいのちを捨てられたのです。「私たちのために」と記されています。この「捨て」たという動詞は、不定過去を使っています。つまり歴史的な事実を明らかにしています。主イエス・キリストは間違いなく十字架で死んでくださった。その死の目的がここに書かれています。私たちのために、あなたのために、つまりイエス・キリストの死はあなたの身代わりだったということです。

私たちはイエス様を覚える時にこの二つのことをその特徴として見ることができます。父なる神のみこころに服従した、これがイエス様の生涯の特徴でした。これは神に対する愛です。二つ目の身代わりの死、これは隣人に対する愛です。ということはイエス・キリストの愛というのは、最も大切な戒め、律法の実践でした。旧約聖書を見ても新約聖書を見ても、最も大切な戒めは神を愛することです。そして次に隣人を愛すること。イエス様はマルコ12：33で「また『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する。』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。』」と語られています。神を愛し、隣人を愛すること、そして皆さんもよくご存じのようにこれは旧約聖書の中でも教えられ、新約聖書の中でも教えられていることです。主イエス・キリストの生涯を見た時に、その生涯は父なる神を何ものよりも愛する愛の実践であり、隣人を愛する愛の実践であった。イエス様が示された愛を考えるとそれは神への愛であり、隣人への愛でした。

さて、IIコリント5：14で「キリストの愛が」と言った時に、我々はこの愛が何を意味しているのか見てきました。パウロはここで、この愛がキリスト者であるあなたのうちにある、同じ愛を実践するようにと働いていると言います。「キリストの愛が私たちを取り囲んでいる」と。キリストの愛がパウロ自身の歩みの動機、原動力であった。主イエス・キリストの愛というのは何者よりも神を愛し、そして自分よりも隣人を愛していた。そのキリストの愛があなたのうちにあるだけでなく、その愛がイエス様が示された愛と同じ愛をあなた自身が実践するように働いているということです。この神への愛、それは

間違いなく神に喜ばれる生き方、生活を生み出すものです。隣人への愛は隣人のために喜んで犠牲を払う生き方生み出すものです。だから先ほど見た I ヨハネ 3 : 16 は続けてこう言います。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」、神の愛がどのようなものであるかをヨハネは教えて、その同じ愛を実践しなさいと教えています。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。」、キリストはあなたのためにいのちを捨ててくださった、それによって愛がわかったと。「ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」、つまり主がなしてくださった愛を今度はあなた自身が実践しなさいと勧めているのです。キリストの愛によって救われたあなた自身がキリストの愛を人に示すことを教えているのです。

だから同じ I ヨハネ 2 : 6 で「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」と言っています。もしあなたがクリスチャンだと言うのなら、あなたはイエス様が生きたように生きなさい。もしこれができないことなら、私たちはこんな命令を受けたら大変な重荷になります。しかし、神はできないことを命じていないのです。神は私たちにできることを命じておられるのです。その証拠にパウロはそんなふうに住きたのです。だから、パウロは「私がキリストを見ながらいるように、あなたがたも私を見ながらいてください。」と I コリント 11 : 1 で言います。つまりパウロは、彼自身の責任がイエス様が歩んだように生きること、彼はイエス様が生きたように生きていたのです。そこで彼は私をみながらあなたたちも同じように生きなさいと言うわけです。パウロはこの手紙をコリントの教会に送っています。パウロは結構な時間をこのコリントの町で過ごしましたから、コリント教会はパウロのことをよく知っていました。パウロがこういうことを言っているのを彼らが聞いた時に、彼らは批判することもできたはずですが、でもこのみことばを見る限り、間違いなくコリントの人たちは確かにパウロが主を模範として生きていたことを認めざるを得なかったのでしょう。私たちが勘違いしてはいけないのは、パウロはコリント教会の人々の前で罪を犯さない生き方をしたのではなかったのです。しかし、パウロも私たちと同じ罪人です。不完全でありながらも、主イエスが歩まれたように生きようとしたのです。失敗や過ちを犯した時はそれを告白し、それを赦していただき悔い改めながら歩んでいってはずです。パウロは私たちに、救いというのはそういうものを可能にするそんな力を持っていると教えてくれるのです。スコット・ハーフマンという神学者は「キリストのために生きることはキリストのように生きることである」と言います。私はキリストのために生きますと言うかもしれない。でも問題なのは、ではキリストのように生きているかどうかです。パウロはそうやって生きたのです。そして彼が私たちに教えること、あなたに言うことは、あなたも私が歩んだのと同じように歩むことができる。だからそのように歩みなさいと。

なぜそれが可能なのか、パウロが教えてくれています。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」、ガラテヤ 2 : 20 です。「私はキリストとともに十字架につけられました」、かつての自分中心に生きて来た私は主イエス・キリストとともにあの十字架にはりつけにして死んだと言うのです。そして「キリストが私のうちに生きておられる」からキリスト中心に生きる私が生まれたのだと。キリストがあなたのうちに生きておられるから、そのキリストがあなたに力を与え、キリストがあなたを通してご自身を明らかにして行かれるのです。ですから、神によって救われた私たちはイエス様が歩んだように歩むことができる。私たちはイエス様を模範として生きて行くことができるのです。ただ違う点はイエス・キリストのうちに罪がなかった点です。悲しいことに私たちは罪を犯し続ける者です。その罪を神の前に告白して赦していただきながら、我々はイエス・キリストが歩んだように歩んで行く。それが可能なのはキリストがあなたのうちにおられるからだともみことばが私たちに教えるのです。

2) キリストのように生きることの具体例

まとめる前にもう少し考えてみましょう。キリストのように生きるというのはどういう生き方なのか、具体的に見て行きましょう。

(1) 神のみこころに服従する：「主への愛」 I ヨハネ 5 : 3 コロサイ 1 : 10

もしあなたが新しく生まれ変わったのであれば、間違いなくあなたには主に対する愛があります。既に見て来ましたが、神様を愛するということは神のみこころに服従することです。もしあなたが神を愛するのであれば、神の命令を守ることです。ヨハネは I ヨハネ 5 : 3 で「神を愛するとは、神の命令を守ること」だと言います。。またコロサイ 1 : 10 でパウロは「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」と言います。「主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ」ること、それが神を愛する具体的な生き方です。私たちは何週にもわたってこのみことばを見て来ました。生まれ変わった私たちは神に喜ばれることを考え、

喜ばれるように生きて行きたいと思っている。それは神を愛する生き方なのです。それはまさにイエス様が歩まれた生き方なのです。生まれ変わった私たちはその願いを持ってそのように生きて行こうとするのです。パウロが教えてくれているように、主になつた歩み、主のみこころに沿った、主の目になつた、主が喜んでくださる、そういう歩みを私たちは実践することができる、それが救われた者たちだと言うのです。

(2) 隣人の益のために生きる：「隣人への愛」 ローマ 15：2、3

神のみこころに服従するだけではない。隣人の益のために私たちは生きるのです。既に見て来たように、イエス様の愛がそういう愛でした。隣人への愛をイエス様は示された。ローマ 15：2-3が「:2 私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。:3 キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。」と言います。このローマ 15：3にキリストの歩みが記されています。キリストはご自分を喜ばせることよりもあなたの永遠について、あなたの幸せについて考え、すべてのことをしてくださったのだと教えているのです。この箇所が教えていることは、イエス様は自分は神だからではなくて、ご自分のことよりもあなたのことを考え、あなたの必要に喜んでこたえて行こうとなさったのです。私たちもその主の歩みにならって生きるのであれば、自分のために生きるのではなくて人のために生きなさい、その人の幸せのために、その人の信仰が成長するためにベストを尽くして行きなさいと言われたのです。

① それはどのように生きることか？

今私たちが学んでいることをしっかり覚えてください。キリストの愛があなたのうちにあるのであれば、あなたはキリストが歩んだように生きて行くことが可能なのです。キリストが歩んだように生きる生き方、それは隣人のために生きる生き方です。救われていなかった時は自分のために生きていました。救われた後は隣人のために、その人の信仰の成長のために、その人の幸せのために生きようとするのです。だからパウロは熱心に福音宣教をしたのです。

a. 「伝道」：「救いを伝えること」——最も大切なこと

もし私たちが周りにいる家族や友人のことを本当に愛しているのだったら、彼らに一番大切なことを伝えなければいけない。例えば自分の愛する家族がこれを食べたらお腹を壊すとか病気になるというものを口にしようとしていたら、私たちは必死になってそれを止めます。だからと言って、どうでもいい人が食べることを勧めるということにはなりませんけれども、言っていることはお分かりになると思います。今イエス・キリストの救いに与っていない人は100%間違いなく地獄に向かっています。そしてあなたはそのことをご存じのほうです。もし彼らを愛するのだったら、私たちは彼らに語らなければいけないメッセージがあるのです。主イエス・キリストによる救いです。また主イエス・キリストによるさばきです。パウロは熱心にこの福音を語り続けた。神が罪人を愛して罪人に救いを与えてくださったように、パウロも同じように罪人を愛し、彼らのために一番聞かなければならないメッセージを語ったのです。私たちはそんなことはもう既にやって来た、友だちを失ってしまったと。我々は一体だれの目を意識して生きているのかです。神に喜ばれるように生きるのか、それとも人を喜ばせるために生きるのかです。少なくとも私たちは我々の周りの人たちから、そんなにすばらしい救いがあることを知っていながら、なぜ私にそれを伝えてくれなかったのかと、そんなことを言われたくありませんよね。パウロは彼らを愛して、罪人を愛して彼らのために一番大切なメッセージを語り続けたのです。彼はこうして隣人を愛するという、その愛を証しされました。

b. 「教化」：信仰の成長を助ける

また同時にその救いに与った者たちの信仰の成長のためにパウロは全力を尽くしました。

* 「行なうべきこと」：テサロニケの教会が実践 I テサロニケ 5：11、エペソ 4：29

いい模範としてテサロニケ教会のことが記されています。I テサロニケ 5：11に、この教会は「互いに励まし合い、互いに徳を高め合」っていたのです。それでパウロは「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」と言っています。継続してそれを行ないなさいと勧めるわけです。テサロニケ教会はそういうすばらしい教会だったのです。信者同士が励まし合って互いの信仰を成長させるために尽くし合っていた。恐らくこの教会には周りの人のことに無関心な人たちはいなかったのでしょう。パウロはエペソ 4：29でも「ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」と言います。ですから私たちは福音のメッセージを語り、その救いに与った人々が成長するために彼らに仕えて行くのです。彼らが成長することを話し、そうでないことは一切口にしない、そのように生きなさいとみことばが教えています。

* 「行なってはならないこと」：各信仰者は徳を高めないことはしない！

ですから、次のようなことをすることによって、あなたの周りのクリスチャンたちの信仰の成長を助

けるどころか妨げになってしまう。

・「悪口」を言うこと：ヤコブ4：11

まず悪口を言うことです。ヤコブはヤコブ4：11で「兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。」と言います。もしクリスチャンと言われる人たちが集まっているところで、だれかの悪口を言っているのであれば、それはもう200%神に喜ばれないことです。神の栄光を現わさないことです。それはもう罪です。先輩クリスチャンであるあなたがそんなことを若いクリスチャンたちの前で語るならば、彼らのつまずきになっています。私たちは人の悪口を絶対に口にしてはならない。

・「罪を赦さない」こと：マタイ6：15、18：35

二つ目に罪を赦さないことです。こういうことがあってはならないのです。人が集まった時に、あの人は大変なことをしたと言ってその罪を赦そうとしない。もちろんその人が罪を悔い改めようとしないのであれば別の話です。もちろん人の罪を赦すということは大変難しいことです。でもみことばはこう言います。「しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」とマタイ6：15でイエス様が言われます。またマタイ18：35では「あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。』」と記されています。ですから人を赦すということがいかに大切なのか、でも赦さなければどうしてあなたが赦されたことを明らかにできますか？赦しの神がおられることをどうやって明らかにしますか？私たちは赦されたのです。だから私たちは赦しを求める人々を赦していくのです。

・「愛さない」こと：Iヨハネ3：10、14

また我々クリスチャンたちが愛さないことも大変大きなつまずきをもたらします。今見て来たように悪口を言ったり、赦してくれと言うのに人の罪を赦さない。またあの人は嫌いだと愛さない。ヨハネはIヨハネ3：10で「そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」と言います。救われた者たちは兄弟を愛すると言うのです。同じIヨハネ3：14にも「私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。（つまり救われたことを知っている）それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。」、ヨハネは救われていないのだとも言います。もしクリスチャンが集まっているところで、クリスチャン同士が悪口を言い合ったり、赦しを求めているのに赦さなかったり、そこに愛がなかったら、どうやってその集まりが栄光を現わしますか？コリント教会はまさにそういう教会であったとも言えます。教会には「争い、ねたみ、憤り、党派心、そしり、陰口、高ぶり、騒動が」あったと、IIコリント12：20に書いてあります。

3) クリスチャン生活の秘訣

(1) 神様に働いていただくこと

パウロは私たちに教えてくれます。キリストの愛はこの救いに与ったあなたがキリストの愛を実践するように働いているのです。あなたを救ってくださった神様はあなたがどんなふうにも生きてもいいと勧めているのではないのです。あなたを救ってくださった神様は、そのキリストの愛を周りの人々に明らかにするその働きをあなたに託したのだと。しかもそのためにキリストがあなたのうちにいてくださり、それをあなたを通して実践してくださるのだと。これがクリスチャンなのです。これが主によって救われた神を愛し、隣人を愛する者たちなのです。なぜならその愛において完全である神が私のうち、あなたのうちにいるからです。その方がその愛をあなたを通して明らかにして行く。これが救われた者たちなのです。私たちクリスチャンがこの地上において生きて行く、その生活の秘訣は、間違いなくこの力である神様に働いていただくことです。主よ、どうぞ私を通して働いてくださいと、神様に働いていただくことが大切です。

(2) 私たちの責任のリスト

でも同時にあなたにも責任があるということをしかりと自覚してその責任を果たすことが必要です。どんな責任があるか、簡単にリストを挙げます。

① みこころを知る

まず一つ目に、みことばから神の真理、みこころをいつも知る事です。神様のおことばを通して神のみこころを知る事です。でなければみこころに従うことはできません。神のみことばを通してしっかりとそれを知る事です。

② みこころに従い続ける

二つ目にそのみこころにあなたが従い続けて行くことです。イエス様が歩まれたように、私たちも栄光を現わすためには、そのみこころに従い続けることです。

③ 聖霊に満たされ続ける

三つ目に常に聖霊に満たされ続けることです。聖霊の満たしというものがが必要です。いつもすべてを主に明け渡して、私たちの思いも考えも私たちの歩みのすべてを聖霊が支配してくださるように、常に聖霊に満たされて歩み続けることが必要です。

④ 罪から離れる

四つ目に、どんな罪からも離れ続けることです。

⑤ 互いに助け合って歩む

五番目に、互いに助け合って歩み続けることです。我々はひとりで生きているのではない。こうして兄弟姉妹がいるのです。テサロニケの教会が実践していたように、一緒に励まし合って主に従って行く、互いに助け合って歩み続けて行くことです。

⑥ 謙虚に仕え合う

六番目に互いに謙虚になり仕え合うことです。私たちの集まりはだれが一番であるか、そんなことを競い合う教会ではありません。ひとりひとりが神に仕える者であり、お互いに謙虚に仕え合って行く者です。

⑦ 主を信頼する

七番目にどんな時にも主を信頼して歩み続けることです。主のみことばを信じ、そのみことばに従って主のみわざがなされることを信じて歩むことです。

⑧ 祈り：主の助けを求める

そしてどんな時にも主の助けを求め続けることです。神が望んでおられる歩みをして行くためには、100%神の助けが必要です。

そうすると、あなたに質問しなければならないのは、あなたの祈りの生活についてです。みことばの中に数多くの信仰の勇者たちが記されています。またそれ以外にも多くの人々の伝記があります。信仰の勇者たちの特徴を一つ挙げるとしたら、それは間違いなく祈りです。信仰の勇者たちは神様の力を知り、自分の弱さ、愚かさを知っていた者たちです。だから常に主に助けを求め続けていたのです。彼らは祈りの人でした。あなたはどうでしょう。あなたは祈りを軽視して、毎日の忙しさにかまけて祈りを疎かにし、時間が取れないと祈りの時間を削っていませんか？人前で祈ることは苦手だと、人前で恥をかきたくないという自分の自尊心を放任していませんか？またいつの間にか祈っても祈らなくても主が決められたことかなるのでしょうかという運命論者のようになってしまっていないですか？少し衝撃的なことを言うと、あなたの生活に何も起こらないのは、もしかしたら祈りが欠如しているからかもしれません。もちろん今お話していることは、熱心に祈ればあなたの欲しいものが必ず手に入るということをお話しているわけではありません。それは聖書の教えではありません。しかし神の助けを必要としているあなたがその力の源である神に助けを求めないで一体何を期待することができるのかということです。

あなたが変わろうとするのなら、神に助けを求めなければいけない。愛する者たちが変わって行くことを望むのなら、あなたは彼らのために祈り続けなければいけない。あなたが主の御栄えを見たいと思うのなら、自分の生活を吟味しながら生きるとともに、主に働いていただかなければいけない。よく言うことは、私たちの信仰がいつの間にか宗教になっていないかと。いつも同じようなことを繰り返してはいるのですが、皆さんの中に主に対する期待がありますか？主が働かれたら私たちが不可能と思えることも必ずそのとおりになるのだという確信がありますか？あなたは全く新しく造りかえられた者として、主の栄光を現わす器として生きて行くことができることを信じていますか？神は私たちをこの地上に置いてくださり、私たちを通して栄光を現わしてくださることを信じていますか？神が働けないのはもしかしたらあなたがそれを期待していないから、神の力を信じていないからかもしれません。神のみこころではなくてあなたのその常識と言われる枠から出て来ないから、神に働いていただく前にあなた自身が可能なのか、不可能なのかを判断してしまう。そんな信仰だから神が働かないのです。もちろん神のみこころがどうなのか、私たちはそのすべてのことを知っているわけではありません。でも少なくとも我々主によって新しく生まれ変わった者たちは、主イエス・キリストが歩んだようにこの地上にあって生きて行くことができるのです。パウロが歩んだように私たちは生きて行くことができるのです。そしてパウロや多くの信仰の勇者たちは神を信じてみわざを期待したのです。

救いというのはただ天国の切符をもらうだけではありません。もっと大きなものがあります。この神の偉大さをこの世にあって証する存在としてあなたや私を造りかえてくださる、それが救いだ。そこにはもちろん天国があり、罪の赦しもあります。しかし、神があなたを地上に置いてくださっている目的は、この神のすばらしい愛を、このすばらしい神を伝えるためにです。救いというのは、自分中心に生きていた私たちをキリストを中心に生きるものへと新しく生まれ変わらせてくれることでした。あなたはそのような生まれ変わりを経験しておられますか？あなたの信仰は本物ですか？あなたはきょう死

んでも間違いなく天国に行きますか？もしそうだとしたらその保証は一体何ですか？ただ幼い時に祈った祈りでしょうか？どこかの集会でサインしたことでしょうか？救いはあなたを主の栄光のために生きて行こう、そういう完全に新しい者へと造りかえてくれるのです。キリストとともに死んだ者だけがキリストとともに生きることができるのです。キリストとともに死んだ者だけがキリストが生きたように生きることができるのです。あなたは生まれ変わりました？生まれ変わったあなたは主にお会いする日を待ち望みながら、この日を大切に真剣に生きています？どうぞご自分の信仰を吟味してください。そして主の前に救いの確信を持って、主に従い続けてください。

《考えましょう》

1. 「キリストの愛によって取り囲まれた生き方」を具体的に説明してください。またそのように生きるためにはどうすればよいと思われませんか？
2. どうして兄弟姉妹の「徳を高めない」ことが問題なのですか？
3. 「徳を高め合う」ためにはどうすればよいと思われませんか？具体的に挙げてください。
4. きょう教えられたことをあなたの信仰の友と分かち合い、実践のために祈り合ってください。